

それでも帰って来てくれた

昭和23年（1948）、78歳になったライトは、もう一度患者に会いたいと再び熊本へ戻って来ました。しかし住まいは家具もなくなり、住める状態ではありませんでした。敷地内の元医師用住宅がライトの最後の家になります。患者との交流や「龍田寮」（ハンセン病患者を親に持つ子供たちの寮）の子供たちとのひと時に心の慰めを得ながら、1年8ヶ月後、ライトは「神様の御恵みにより、私は幸せでした」というメモを残して、波乱の生涯を閉じました。

2人は今も、患者たちと共に、記念館そばの納骨堂で静かに眠っています。

両女史ゆかりの記念館

記念館は、納骨堂と共に残った回春病院時代の貴重な建物です。大正8年（1919）にハンセン病研究所として建てられました。設計は当時の建築界の第一人者、中條精一郎です。リデル没後にライトが2階を増築して住みました。1階は病院の事務室でした。

戦後は、回春病院敷地の半分になった「リデル、ライト記念老人ホーム」(平成20年「リデルライトホーム」と改称)の管理棟として利用されてきました。



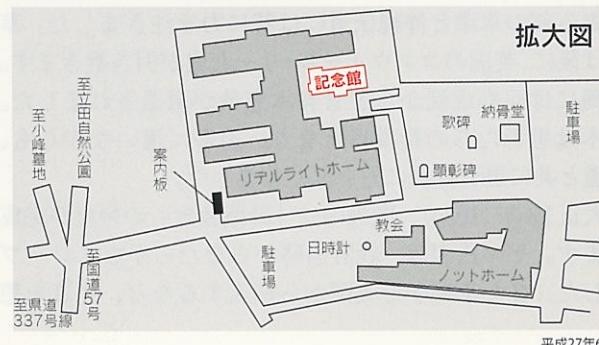
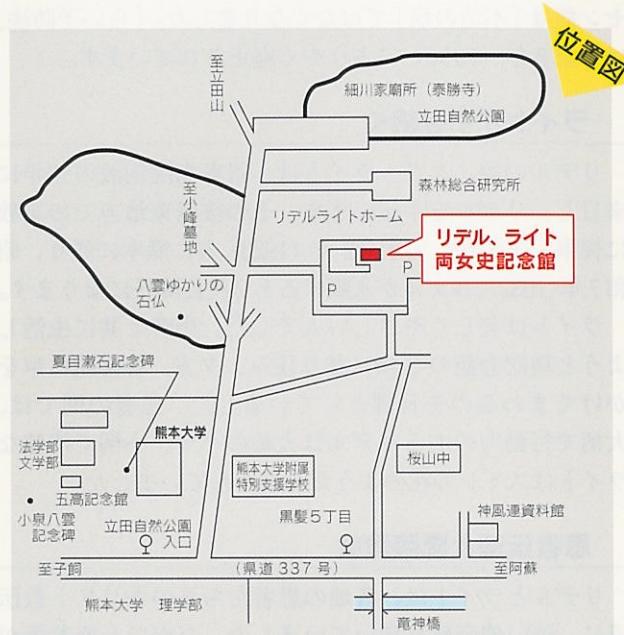
大正8年頃の研究所

平成4年（1992）10月20日、この建物は熊本市に寄贈され、同6年2月3日「リデル、ライト両女史記念館」として開館し、両女史の顕彰に役立てられています。

平成20年3月19日、国の登録有形文化財になりました。

參 觀 案 內

開館時間	午前9時30分～午後4時30分
休館日	月曜日(祝日の場合は翌日)
	年末年始
入館料	無料
所在地	熊本県中央区黒髪5丁目23-1
TEL	(096)345-6986
管理団体	リデル・ライト両女史顕彰会
	熊本県中央区黒髪5丁目23-1
	TEL(096)343-0489
ホームページ	http://www.riddell-wright.com
メール	kinenkan@riddell-wright.com



リデル、ライト両女史 記念館



リデル、ライト両女史顕彰会



ハンナ・リデル
Hannah Riddell
(1855-1932)



グレイス・ノット
Grace Nott
(1863-1947)



エダ・ライト
Ada Wright
(1870-1950)

初めてハンセン病患者を見た

ハンナ・リデルは、ロンドンで生まれ、明治24年(1891)、英國国教会の宣教師として熊本に派遣されました。35歳でした。来熊後、咲き誇る桜並木の下にうずくまるハンセン病患者たちの姿を見た時、生涯をかけてこの人たちと生きようと決意します。

当時、ハンセン病は「不治の病」とされ、人々に恐れられていきました。患者を援ける公的な施設もなく、救済活動は無謀だと周囲に反対されました。しかし、リデルは諦めず、同じ船で来熊した宣教師グレイス・ノットを同志として、協力者や資金を募り、明治28年11月12日「回春病院」を創設しました。リデルは生涯をハンセン病患者救済に尽くしました。

病院の草創期を共に築いたノットは、明治末に英國に戻りましたが、時に寄付を続け、昭和12年(1937)に作成した遺言状には、病院へ遺産の一部を譲渡する旨を明記しています。ノットも生涯英國から病院を支え続けたのです。

国を動かす

リデルの患者救済への情熱は、国をも動かしました。日露戦争の時、英國からの送金が途絶えがちになると、リデルは、大隈重信に回春病院への援助を求め、またハンセン病患者の救済は国家の義務でもあると訴えました。かねて

この問題に大きな関心を持っていた渋沢栄一らは、リデルを支援すると共に、ほとんど顧みられる事のなかったハンセン病問題を国家問題に転化させました。

明治40年(1907)に「癩予防ニ関スル件」(法律第11号)が制定され、全国に5つの療養所が出来ます。この時は、患者の救護に重点が置かれ、必ずしも隔離するためのものではありませんでした。記念館には大隈重信からリデル宛に「政府がこの問題に乗り出す」事を伝える書状が残されています。

しかし時代の流れと共に、「癩予防ニ関スル件」は、昭和6年(1931)、同28年と改定されて「らい予防法」となり、隔離の思想を強めていきました。戦後、新薬によりハンセン病は「不治の病」ではなくなりました。「らい予防法」は平成8年(1996)によく廃止されています。

ライトが引き継ぐ

リデルの姪、エダ・ライトは、回春病院創設の翌年に来日し、リデルを手伝えます。その後関東地方での宣教に従事しますが、大正12年(1923)末に熊本に帰り、昭和7年(1932)、リデルが永眠すると2代目院長になります。

ライトは美しくやさしい人でした。患者と共に生活しようと現記念館の2階に移り住み、夕方、各部屋に声をかけてまわるのを日課としていました。患者の間では、大柄で行動力のあるリデルは大輪のバラ、小柄で清楚なライトはスミレの花のようだと言われていました。

患者伝道と降臨教会

リデルとライトは、各地の患者たちへのキリスト教伝道に、強い使命感を抱いていました。なかでも療養所が出来る前の草津と沖縄伝道には特に力を注ぎました。草津は後に、英國のコンウォール・リー女史が引き継ぎます。沖縄には回春病院から患者青木恵哉が派遣されました。青木は患者たちの指導者となり、迫害に遭いながらも、伝道と共に患者救済に力を尽くしました。

大正13年(1924)、敷地内に「降臨教会」の聖堂が完成します。その正面は、設計当時からならかなスロープでした。また車椅子を英國から輸入するなど、患者を想



創建当時の降臨教会

う心は自然に福祉の先駆けとなりました。

庭の日時計には、世に隠れ住んでいた人々に明るい太陽の光の下で生活して欲しいという願いがこめられています。

現在3代目となる教会の中では、回春病院当時からの祭祀具や、両女史愛用のオルガンを見る事ができます。

近づく戦争の暗雲、そして悲劇の日

昭和15年(1940)9月、病院主事飛松甚吾や降臨教会牧師豊福浪雄が警察に拘留され、ライトはいわれのないスパイ容疑で調べられます。ライトの家には警察官が泊り込みで監視しました。

そして昭和16年、リデルの命日である2月3日、集会所に集められた患者たちは、突然病院解散を宣告されました。予防衣姿の係員が畳の部屋に土足で踏み込み、勝手に荷造りして外に放り出します。患者たちは強制的にトラックに乗せられ、九州療養所へ移されて行きました。たまりかねたライトは、最後のトラックにしがみついて引きずられます。それに応えるように、車の中では自然に讃美歌が湧き起こりました。これが46年続いた回春病院の最後の光景でした。

同年4月2日、傷心のライトはオーストラリアへ旅立ちました。事実上の国外追放でした。